

書評

大谷藤郎 著

ひかりの足跡

ハンセン病・精神障害とわが師 わが友

山内俊雄

つい先日、ある新聞に、『隔離百年を問う集会』との見出しで、こんな記事が出ていた。『ハンセン病の公立療養所ができて 100 年を迎え、全国ハンセン病療養所入所者協議会は (2009 年) 11 月 17 日夜、東京都内で「ハンセン病隔離の 100 年を問う東京集会」を開いた。出席した厚生労働相は、「国の施策が厳しい差別を生み、苦痛と苦難を与えた事実に対して厚生労働大臣として反省し、おわびする」と述べた』

淡々と記されたこの記事に含まれる深い意味を、私は感慨を持って読み取っていた。というのも、「ハンセン病・精神障害とわが師 わが友」という副題のついたこの本から、ハンセン病を隔離、排除する法律によって、病者がどれほど阻害され、悲惨な状況に置かれてきたかを学んでいたからである。

この本では、著者がなぜハンセン病研究者になろうとしたか、社会医学への道を歩み、厚生省 (当時) の仕事にかかわるようになったかという、著者の歩んだ道程と、その折々に著者に影響を与えた「わが師 わが友」について語られている。そして、著者が「精神衛生課」に赴任したことから、ハンセン病にとどまらず、“こころ病む人びと”の生きる権利の問題にまで、著者の取り組みが広がりを見せることになったいきさつが、つぶさに述べられている。

人が自分の人生において、自らの生き方に影響を与える、師と呼ぶにふさわしい人を持つことは幸せである。著者が、医師としての生き方やハンセン病とかかわるようになった直接の師、小笠原登 (京都帝国大学皮膚科助教授)、そして登先生の思想のバックボーンとなってい

た、浄土真宗の僧侶であり哲学者である、お兄さんの小笠原秀実先生、この 2 人から、“真理への愛” “人間の平等の愛” を希求する精神と態度を学び、そのことが、著者の歩みの基底に一貫して流れている “人間をどうみるか、人間と社会をどうみるか” といった、人間の根源にかかわるテーマに結びついていることを知るのである。

著者が社会医学への路を歩み始めて出逢った師、特に佐久総合病院の若月俊一をはじめとする何人かの社会医学者、その人たちの中で培った “医学という専門分野の手段によって、社会的に困っている人たちのため、階級無き平等の社会を目指そう。自分の社会医学を全うする人間になりたい” と考えるのである。

そしてまた、厚生省の役人として、全国に精神障害で苦しんでいる人たちが放置され、不当に処遇され、その家族も悩み苦しんでいる現実と直面し、“精神保健・福祉は、単なる医療の技術だけではない、人間をどうみるか、人間と社会をどうみるか、人間の根本にかかわる問題” と認識する。

この本は 1 人の人間の思想や人間観、社会観がどのように形成され、その人の人生の基底を形づくるのかを見事に描いているとともに、この社会で阻害され、虐げられている人のために、そして、障害者との共生を求めて生きた著者ならびに数多くの人々の生きざまを知る、貴重な大著であり、感動の書である。

(埼玉医科大学)

●A5 532 頁 2009 定価 4,725 円 (本体 4,500 円+税) メチカルフレンド社